ことばの教室だより

白岡市立篠津小学校
平成２９年９月号

２学期がスタートしました！のんびりした夏休みから、運動会に向けて慌ただしく活動が続く日々になります。夏の疲れや気圧の変動・気温差などから体調を崩しやすい時期でもあります。早寝早起き朝ごはんの生活習慣を整え、疲れたら十分な休養をとって元気に笑顔で過ごせるといいですね。

夏休み中、様々な研修に参加し、いろいろなお話を聞く機会がありました。たくさんのお話を聞く中で、周りの人々の障害に対する理解や態度の大切さを改めて感じました。今回は、その中から３つのお話を紹介します。

「手話を知って、生きるのが楽になった」 ～コミュニケーション手段の構築～

公開講座「きこえにくい子・聞こえない子の理解と支援」
埼玉県特別支援学校坂戸ろう学園教諭　和田壮史　先生

和田さんは、音は多少分かるが判断することができない重度難聴の状態に比べ、幼い頃からの訓練により発話は比較的明瞭でした。口話によるコミュニケーションをとっていた頃は分からないことや聞き間違いもあり、それらが原因で誤解を招いてしまうことがあり、人間関係に悩むことが多かったそうです。手話にしてから、「聞こえない」ことをはっきり示すことで気持ちが楽になり、それから「しゃべらない道を選んだ」ということです。

今まで漠然と「話せた方がいい」と思っていましたが、難聴による不自由さを知らない考えなのだと知りました。難聴といっても、聞こえ方も話し方も人それぞれであることを十分に理解して接することが大切であると再認識しました。

やりにくさを知り、支援につなげる

特別支援教育基礎講座
「発達障害のある幼児児童生徒の特性を踏まえた指導・支援の実際」
植草学園短期大学　教授　漆澤　恭子　先生

何でつまずいているのか、どこにやりにくさを感じているのか、など実態把握した上で、特性に応じた支援を行い、安心して学習や活動ができる場を作っていきます。支援は

- 黒板の上の方が届かないから台を使う。
- 声が小さいからマイクを使う。
- 逆上がりができないから補助版を使う。
- 針に糸が通せないから糸通しを使う。

のように、できる人には必要のないけれど、できない人にはあるとよいものであり、誰でもみんなが受けられるものであるという認識を学級で作れるとよいというお話でした。

配慮や支援がとても身近に感じられる説明でした。支援が「特定な子に対する特別なものではない」「できるようになるためのお助け道具」と考えやすくなると思います。

「図書館は本来あらゆる人にサービスするものです。それがかなわないのは図書館としての障害です。」

埼玉県特別支援養育研修会　第５７回研究協議会　特別講演会
埼玉県特別支援学校塙保己一学園高等部専攻科　竹内智美さん

先天性緑内障のため７歳で失明した竹内さんは、大学卒業後、図書館に就職しました。そこで、図書館サービス理念の素晴らしさを知ったということです。それまで、目の見えない自分が障害者であって、いつも助けられる側と感じることが多かったけれど、「図書館としての障害」という言葉を聞いて、常にサービスを受ける自分という考えから解放されたそうです。

「障害」もとらえ方で全く違う見方になり、みんなが生きやすい世の中にしていくことができるのだなと思いました。

運動会前の通級指導について

各校で運動会に向けて練習が始まっていると思います。通級時間と運動会練習が重なった場合は、基本的には在籍学級での練習を優先させてください。天候により急な予定変更もあると思いますので、連絡をいただければ、その都度臨機応変に対応いたします。よろしくお願いいたします。

秋の七草

「万葉集」で山上憶良（やまのうえのおくら）が詠んだ秋を代表する草花です。春の七草とは違い、摘んだり食べたりするものではなく、観賞するためのものです。

白岡市教育委員会
0480-92-1111（代表）
篠津小学校ことばの教室
0480-91-0017（直通）